

懸命に生きるあなたの姿…人々の心の灯に

前を向くその先に、ひとすじの希望の輝き見えて
※書籍右横の番号はセンターでの検索番号です。



心的外傷と回復

1996年 みすず書房
ジュディス・L・ハーマン(著) 中井久夫(訳)
[300-2]

戦争の帰還兵、レイプ被害者、監禁や家庭内暴力の被害者などのサバイバーたち…。その理解しがたい言動と生きづらさには共通点がある。それは自分を守ろうとする努力の結果であり、治療者や家族がその状況を理解すれば、不用意な発言で彼らの「生きる希望」を失わせることはなくなるはずだ。グループや個人でのセッションは出てくるが、専門の治療者は今も多くない。精神科医が治療の方法と回復の段階をイメージ出来るように説明されている本書。丹念に選ばれた言葉と多くの症例が理解を深めてくれる。(さっと)



九時の月

2017年 さ・え・ら書房
デボラ・エリス(著) もりうちすみこ(訳)
[1200-2]

イラン革命後の首都テヘラン。人が人を監視し合う環境下で鬱屈した日々を過ごす15歳の少女ファリンはある日、転校してきた女生徒と愛し合うようになりひとときの安らぎに包まれる。が、「同性愛は犯罪」と定める国家に囚われ、暴力による尋問後に死罪確定となってしまった。処刑直前に救い出されて祖国を脱出するも、待ち構えていたのは「なお残酷な屈辱の生」であった。本書はレスビアンとして生きる著者が実話に基づいて綴った物語。いまだ同性愛者を死刑や禁固刑等で罰する国70以上。心の震え今も残る。(みっと)



15歳、ぬけがら

2017年 講談社
栗沢まり(著)
[1200-2]

「ぬけがらってその蟬の生き方そのものって気がするんだよね、僕は」蟬のぬけがらを見て語る塾長の言葉が麻美の心に響く。貧困故に給食無しの夏休みをどうして過ごそうかと悩む少女が、「お昼を食べられるよ」と同級生に誘われて学習支援塾に通い始める。

彼女と、夜の仲間・友人や年下の子・支援するオトナたちとの一夏の物語。現実には翻弄されながらも、少しずつ前を向いて進む十代の揺れる心がリアルに描かれている。少女の気持ちと会話が交錯した、テンポのよい文は一気に読める。(ルナ)



障害のある私たちの 地域で出産、地域で子育て — 11の家族の物語

2017年 生活書院
安積遊歩、尾濱由里子(著)
[1200-3]

性的役割分業などの内面化されたジェンダー意識、優生思想、差別など、現在の様々な環境や制度の障壁を乗り越えて、出産・子育てをする、「障がいのある親の子育て仲間」のエッセイ集。

本書で紹介されている、「障がいと向き合い地域で出産・子育てをする11の家族の物語」は、障がいのあるなしにかかわらず、これから子どもを持ちたいと考えている人たちを勇気づけるであろう。

障がい者が安心して子育てでき、利用しやすい医療・福祉などの法整備が望まれる。(かかし)